

評議会社会主義について

— リシャル・ゴンバンによる —

江口 幹

春から体をこわして、かなりよくなったものの、まだ十分には恢復していない。それで、本誌に《きちんとした、重い》文章を求められたものの書くことができないので、このところ少しづつ資料を読んでいる、評議会社会主義についてのノートの一部を公開して、責めをふさぐことにしたい。以下は、リシャル・ゴンバンの見解の要約である（ゴンバンについては、D・アブター／J・ジュル編『現在のアナキズム』、大沢正道他訳を参照されたい）。

一、現行の共産主義の批判、伝統的労働者組織の批判は、搾取社会（つまり現在のすべての社会経済制度）についての新しい批判に通じ、この批判は、マルクス主義の分析の古典的な展望を独自に拡大させた。

自分の生産物と分離されている生産者の、経済的疎外は否定されてはいない。しかし同時に、労働者は毎日の生活の中で、日常の彼の行為の中で、多数の疎外の対象となっていることも注目された。

その点から見て、家族は最初の疎外の機構であり、そこで社会全体の権威主義的な、階級化された規範が再生産されている。学校とすべての教育は、人間の自発性、好奇心、創造への自然な欲求と自己とを分解させ、命令されることを受入れさす作業をつづける。すべての性的なモラル、タブーは、個人の自由な個性の破壊の方向に向っている。一たび子供が大きくなれば、消費者、労働者、退職年金生活者の役割が強いられる。人間は、生涯のすべての様相の中で、自分の欲求と真の満足から分離されている。

人間の本質を再発見するには、疎外の経済的政治的な現実を意識するだけでは足りない。人間が自分自身の主人となりながら分離を廃棄しなければならないのは、生活のすべての領域においてであり、集団の水準において、社会生活のすべての分野の意識的な管理をしながらである。ここには、全般的な自治管理への渴望がある。

この渴望をどう実現するか。すべてのレベルにおける自治管理を可能にする組織形態は、どのようなものか。これらの要望に応えようとするものが評議会社会主義である。

二、マルクスとエンゲルスは、党の必要にも指導の要求にも異議をさんでいない。しかし、彼らは組織論を与えてはおらず、マルクス主義の組織についての最も完成された形を描いたのはレーニンである。

さて、レーニンのあらゆる概念は、労働者階級は自発的には同業組合的な利害の意識にしか到達しない、というあの確信にもとづいている。社会主義的な意識（つまり革命の必要についての意識）を獲得するには、歴史的進化について明確な意識を持つ人々に頼らなくてはならない。この考えの中では、党は、階級に対しそれ独自の階級的状況の意識を供給し、ブルジョア国家の打倒に導かねばならぬのにふさわしい機関を意味する。

この分析は、多かれ少なかれ大半の左翼によって受け入れられている。相違は、指導の柔軟な、ないしは厳格な原理、階層制、規律、分派の禁止ないし存在などの、組織のあり方をめぐってにすぎない。

しかし、今日の左翼急進主義者は反対に、プロレタリアートの意識の中に歴史的進化の要素を見る。したがって、階級意識の預り人、革命党について問題にすることはありえない。組織は、認識をもたらした大衆にそれを浸透さすどころか、労働者の自発的意識の表明をしか現わしえない。政党共産主義に對置されるのが評議会共産主義である。

三、労働者評議会の理論は異なった内容を意味しうる。

歴史的にはそれは、ソビエト革命とドイツにおける評議会運動の失敗についての反省であった。それは当時においてはなおマルクス主義に属しており、その正確な解釈を自称していた。

それはまた解放された社会における管理型態にもかかわっている。その資格でそれは、社会主義に内容、評議会組織によって管理される経済的、社会的、政治的生活）を提供する。

最後に、言葉の最も狭い意味で、評議会の理論はプロレタリアートの革命組織の模範を提供する。今日、最も問題とされているのはこの最後の意味においてである。

四、今日、フランスにおいて工場評議会の思想に照明が当てられているのは、いくつかの歴史的伝統の想起にもとづいているが、その一つは、ローザ・ルクセンブルクである。

一九〇五年のロシア革命は、ローザ・ルクセンブルクに、彼女の超正統マルクス主義と三つの社会民主党の中で彼女の活動と、きっぱり訣別させる反省をもたらした。彼女は、当時のロシア帝国の国中の革命は、いかなる調整も予備的な決定もなしに自発的に始まったことに注目し、そこから革命を勃発させる、ないし《取消す》のは一党の力ではない、と推論する。これはもちろん、一挙に前衛党の役割の問題を提起する。

彼女は、「革命組織は、大衆ストライキを誘発しないのみならず、組織はそれ自身闘争の産物である」と書く。これは必ずしも工場評議会を目指しているわけではないが、ここには、萌芽として、評議会主義の概念の堅い中核がある。

ローザにとって大衆が党を拒否するのは問題外で、彼女には矛盾があるが、その生涯の終りに、一九一八年のドイツに現われたような、大衆の革命的本能への全幅の信頼を示しており、彼女が新しい伝統の起源の一つであったことは確かである。

ゲオルグ・ルカーチも、同時に党の人間であり、大衆の自発性

の理論家として、ローザの曖昧さと矛盾をとにもする。しかし彼は、階級意識をプロレタリアートの自己解放の決定的要因、歴史の動力と見、一九二〇年三月、階級意識は効果的に実現されるためにはどのようにしてかを自問した時、それは工場評議会の中である、とはつきり答えた。いくつかの留保すべき点はあるが、ルカーチの中には、今日の見て採用すべき望ましい領域がある。

五、評議会主義の伝統は、一面ではアナキストたちによって伝えられた。しかしそれは『正統派』のアナキストによってではない。

フランスのアナキズム運動は、第一次大戦後ほとんど存在しなかった。伝統は、若干の著作家たちによって維持されただけで、彼らは火をたやさないこととおおむね満足していた。

第二次大戦後、アナキスト連盟は、新聞を介して古典的な主張を宣伝し、正統派マルクス主義同様に、彼らが神聖不可侵と見なすイデオロギーを擁護した。最近五十年間のあれほど豊かな経験に照して理論を刷新することができず、偉大な先達やスペインの『神話』を記念する機関に堕していた。

したがって、『正統派』のアナキズムは、現実には有効な新しい理論の形成に何一つ貢献しなかったが、それをしたのは、孤立した若干のグループや著者たちであった。中でも注目すべきは、反マルクス主義的反感を高めることを自らに禁じ、教訓を引きだすために二十世紀の革命的経験を受け入れ研究した、雑誌「黒と赤」グループの場合である。このグループは、裂け目をマルクス主義とアナキズムの間にではなく、社会主義の官僚主義的な概念と絶対自由主義的な概念の間に置いた。

初め「黒と赤」は、手段は目的を決定する、いいかえれば前革命期の組織は社会主義社会の管理型態（したがって社会主義の内容）に影響を及ぼさずにはいない、という旧いアナキストの格言をとりあげ、自由に連合した、小さな自治グループという形の組織についての古典的な図式を説いた。工場評議会という觀念がなかったわけではないが、まだ抽象的な形で言及されていた。

ついで、一九六四—六五年以来、「黒と赤」は工場評議会の現代の経験のすべてを思い出させ、革命組織としての、また経済的管理の形態としての、この觀念の具体的内容を討議した。「黒と赤」のこの活動は重要である。なぜならそれは、六十年代まで実際には知られていなかった、マルクス主義に拠る大半の運動が決定的に無知であった、すべての革命的伝統を読者に伝えたからである。スペインの農業共同体、自治管理企業、民兵隊、マフノー運動、クロンシュタットの反乱の諸経験が発掘され、ユーゴスラヴィア、アルジェリアにおける自治管理の試みが検討された。こうして、「黒と赤」は、アナキズムとマルクス主義の枠から解放され、可能な超越の道、評議会共産主義が形成するとみなされるものに進むことを可能とした。

六、ロシアとドイツの革命の経験から出発して、最も極端な結論を引きだしたのは、ドイツ・オランダの極左である。アントン・パンネコック（一八七三—一九六〇）が評議会主義者グループの最も代表的な思想家であり、彼の思想は半世紀を越える活動の経験にもとずき、その理論は、過去と現在の評議会主義者のあらゆる觀念に多かれ少なかれ痕跡をとどめている。

パンネコックのあらゆる思想は三つの知的テーゼと歴史的経験

にもとずいており、それらのテーゼは第一次世界大戦前にすでに定められ、生涯の終りまで彼の思想の中心にとどめられていた。

1. 歴史についての唯物論的な概念。これは明らかにマルクス主義から彼にもたらされた。歴史と社会の進化を研究するに当って、パンネコックは生産様式と階級闘争の關係に立脚する。人間の世界では、生活のための闘いが道具の發展と完成とに導いた。技術の進歩、生産力の進歩は、社会の清算とその進化のための基礎となるものである。この進化それ自身は、動物界における進化と全く同様に法則にしたがっている。

2. しかしその闘争は、それが社会の物質的環境の中での変革（機械、生産、生活の物質的様式）に呼応しているとしても、意識的なレベルに位置している。そこにカウツキー流の機械論的なテーゼとは反対のものがある。

人間は、変革を成就する前にそれを考えなくてはならない。革命過程は、階級意識の發展と生産の組織化とに、同時にかかわっている。パンネコックは主観的な要素を重視する。死のしばらく前に彼は、闘争の成果は、プロレタリアの日常の経験によつて、その思想の中の《生き生きしたもの》によつて、または討議によつて、継続される認識の明確化によつて獲得される、と断言している。

プロレタリアートは、ブルジョアジーの力が今日では特に精神的な力があるだけに、それだけ自己の任務についての明確な意識が必要である。パンネコックが《ブルジョアジーの精神的権力》と呼んだものは、その物質的な搾取力同様に危険である。ブルジ

ョアジーの考え方は、労働者の精神の中に、生産方式の論理によつて、教育、宣伝、言論界などによつて浸透している。プロレタリアートはブルジョアジーへのこの完全な知的従属の中にあり、勝つためにはそれを免がなくてはならない。資本主義は実際に廃止される前にまず理論的に打倒されなくてはならない。

「自由への道は、労働者階級すべてが、自治活動と自治管理の重要性を深く心にとどめるだろう日にしか開かない」。

3. 人類を解放するのは、全体としての労働者階級である。パンネコックが革命過程における大衆行動に与える重要性から、革命と組織についての彼の観念が生じている。彼は、大衆に《任務》を成就することを帰している。すなわち、彼ら自身の労働の主人となり、生産手段を管理すること。したがって、闘争の組織と型態を創造するのは大衆である。

一九一四年以前から、パンネコックは、党に指導と伝達等々の複雑な方式を授け、党を決定的に《制度化》した社会民主主義の実践と理論とに対立する、過程としての組織の観念を練りあげる努力の中で、ローザ・ルクセンブルクや他の《急進社会主義者たち》と合流している。

しかし、彼の工場評議会の《体系》は、一九一七—二〇年の革命（ロシア、ドイツ、オーストリア、ハンガリー）の経験のあとにしか、形をなさなかつた。それらの経験は、否定的には、政党社会主義への彼の批判を發展させ、肯定的には、評議会社会主義についての彼の観念を形成させた。

七、一九二一年、パンネコックはすでに、ロシア革命をブルジ

「ア革命と呼んでいる。そこから生まれた制度は、官僚階級が生産手段を独占的に（そして集団的に）所有している範囲で、国家資本主義である。西欧諸国のブルジョア階級のように、彼らは搾取と剰余価値とで暮している。パンネコックはまた、それを国家社会主義と呼んだ。なぜなら、国家は唯一の雇用主であり、それは生産を強制的に規制したからである。」

国家資本主義ないし国家社会主義（同じ現実の二つの面）の中の、肝心なこと、実態は、プロレタリアートが生産手段をそこでは自分自身で管理していないことである。そこから、政党社会主義は、現代資本主義の効率の要求に呼応する、支配の新しい理論であり実践である、と結論される。

十九世紀における解放の思想としての社会主義は、労働者階級が身を委ねた指導者を権力の座におこうとする、不十分な解放のスローガンでしかなかった。その目標、経済の国有化と国家の制覇は、明確に資本主義の必要に呼応している。

政党共産主義によって着想されるすべての組織は、ロシア資本主義の力を増大するためか、競争的資本主義の道を進むか、なおそれらに甘んずるためかの、結局は手段となった。そうして、組合は今や階級の外にある。それは市場に労働力を売るための仲介者として役をもっている。それは、《支配機構》の一部となった。

八、政党社会主義にパンネコックは、解放の真の要素を代表する、評議会社会主義を対置する。その具体的な例を彼は、一九一八—二〇年のドイツ革命の時に見た。しかしすでに第一次大戦中に彼は、組合組織の外に（あるいはそれに反して）自分たちの代表を選出した、工場委員会の自発的な形式を観察した。一九一九年以

来、彼は各種の極左新聞の中で、レーテシステムの功績について論じた。彼はそこに、社会主義社会の管理の、かつ組織の、可能な型態を予感した。生産は、戦場総会の決定にもとづくであろう。大工場の場合には、管理機関を形成するのは代表者会議であろう。委任は選挙により、代表はいかなる瞬間にも解任されうるし、会計帳簿は誰にでも公開され、報酬は労働時間で計算されよう。

しかし評議会は、经济管理にのみ限られたものではなく、それはまた、政府の現行型態に代るものとなる、政治機構を形成するものでもあろう。それらの中では、政治と経済の分離は消滅するであろうし、専門家と生産者との間の分離も消滅するであろう。

九、工場評議会は革命期に現われる。もっと正確には、それは、プロレタリアートが資本主義によって到達した進化の段階の結果として作りだす、組織の《新しい形》を表明する。ブルジョアジ―がその歴史の過程で与えられた主人たちを漸次取り除いたように、労働者階級も自らが到達した成熟の度合に呼応する機関を自らに与える。工場評議会の中で彼らは、初めは、新しい主人の拒否を直接に表明する。指導を変える代りに、彼らは指導の役割そのものを廃止する。

プロレタリアートが自らに与える自治的な組織はまた、工業諸国のプロレタリアートの成熟を証明する、闘争の新しい形にも呼応する。資本に対する闘争は、以来直接行動（山猫スト、工場占拠など）によって行われる。それは、敵対のブルジョア的型態（議会主義、政府参加主義）や政党社会主義の道（組合運動、党派的政治）の外で行われる。

パンネコックの思想を要約すると、工場評議会は、一面では社

会主義社会の（政治的、経済的）管理の型態を、他面では所与の歴史的段階に現われる革命闘争の機関、そこでプロレタリアートが自分たちの任務についての自覚を漸く手にする機関を意味する、というる。

十、パンネコックが提起している、そして今日の大半の評議会社会主義者が討論しつづけている問題、それは革命組織の存在、役割、必要性である。いいかえれば、別の名称の下に再び現われる、党についてのあらゆる問題である。この点についてパンネコックの態度は明白ではなく、彼自身、強制的な組織の觀念と、それと対立する自然発生主義との間を行ったり来たりする。

確かに、彼の体系の論理、つまり、評議会の自発的な発生は、ソビエトを準備し、場合によっては生じさせることを任務とする、あらゆる組織を排除する。彼が、実際に当ってプロレタリアートは《研究グループ》を必要としない、なぜなら時が来れば彼らは自分たち自身の機関、評議会を創設するから、という時、彼が声明しているのは前述の考えである。革命を行うのは党ではなくて、全体としての階級である。

しかし、別な面でわれわれは、過程の精神的な性格の強調を見た。革命の仕事は意志の問題である。人々は変革を、それを成熟する前に考えなくてはならない。そして、将来の《方向》を選択するために労働運動の内部で討論が行われねばならず、この討論の中で、研究グループは取るに足らぬものではない。グループは、生れかかっている思想を明確にし、それに適切な形を与え、それを宣伝しなくてはならない。要するに、彼らの役割は理論形成にある。

パンネコックは、こうした《グループ》のあり方について、しばしば意見を変えている。しかし彼の著作を通じて彼は、レーニン主義的な意味での党を問題にしているのではないことを明らかにしながら、そうしたグループの存在について固執している。それに《党》という言葉も彼の著作の中に出てこないわけではない。彼はそれを《作業グループ》の連合、プロレタリアートの《集団的思考の機関》、《精神的型態》と見なす。

一九四七年に彼は書いている。「党には、思想と認識を詰め、社会思想を研究し、討議し、形成する役割、宣伝によって大衆の精神を啓発する役割が属する。工場評議会は、労働者階級の実践行動の、闘争の、機関である。党には労働者階級の精神的な力を形成する任務がある。その仕事は、労働者階級の自己解放にとつて欠くことのできないものである」。

十一、アントン・パンネコックは、生涯を通じてマルクス主義としてとどまった。それ故に、彼の評議会社会主義は、その経歴に由来する瘍跡がある。特に、彼は階級闘争の経済的な面、経済の力と型態との進化を特別視した。彼の史的唯物論は、時に進化論に陥っているし、《生産力本位主義的》なような、そこでは労働が遂に喜びの中で行われる、社会主義社会を彼に想像させがちである。（彼の労働観は、今日の状況主義者のそれとは正反対である）。

更に、彼の社会主義は、ところどころレーニンの社会主義に似ている。社会主義社会の中では、成長率、経済的進歩は資本主義社会においては知られなかったリズムに到達するだろうし、と彼は書いている。彼の社会主義はなお、今日の全くの左翼急進主義

者が認めない、実利主義の浸透を受けている。

プロレタリアートの定義でも、バンネコックは、彼の時代を越えていないし、限られたプロレタリアについての觀念しか持っていない。彼の労働者は、今日の第三次産業の労働者や技術者を含んではない。

しかしながら、他の分野では、彼は驚くほど現代的な、かつ予言者の考えを伝えることができた。彼は（すでに一九四七年以

特集 自治管理・労働者評議会

自治管理と新社会

一、輕蔑の拒否

現在少くとも自治管理には二つの経験が存在する（1）。多分異常なものではあるが、しかし模範としての価値を持つものである。二つともに、周囲から無関心のみならず、敵意を受けている。それはほかの社会主義諸国の埒外にあり、長い間それらの国ぐにの敵意的となっていたユーゴスラヴィアの経験であり、更に自由主義諸国の工業生産における協業の、ずっと限定された、知られていない、あるいは誤解されている経験である。

ユーゴスラヴィアの自治管理は二十年ばかり前に、ソヴェト型

来！）直接行動、山猫ストライキ、工場占拠について語っているし、彼が主観的な要素（意識、意志……）に留保した位置は、現在の左翼急進主義者の觀念に完全に結びついている。

殊にバンネコックは、「労働者の解放は労働者自身の仕事である」という言葉を完全に達成するよう理論を構築しようとした故に、《今日的》である。そのため、彼の思想は現在進められている討論の中心にある。

アルベール・メエステル

三木 明 訳

を真似た独裁的な計画化の時期に引続いて始められた。労働者たちに管理されているにもかかわらず各企業は、計画化機構の中に組入れられていて、その機構は、最近数年間は無活動状態にあるものの、国家投資、新経済活動の指定、雇用政策については依然として至上権を持っている。そして税制のおかげで、公権力は各企業の投資を方向づけることができ、殊に投資と分配（賃金、個人的な特別手当、従業員全体の労働条件改善）との間の配分の鍵を握っていることができる。